

風景デザインレター from 九州(第 15 号)

今、面白がっていること。岡村さんも一緒だと思いますが、オリンパスのデジカメ『PEN』で遊ぶこと。このカメラは、いろいろな刺激を与えてくれます。今回は、このPENのPRです。……

ジョン・バージャーの「見るということ」を読み、PEN で撮りながら

見るということ

今西錦司がダーウインの進化論に反論したのは有名？な話ですが、彼が、自然そのものをどのように見ていたか、次の言葉が印象的でした。「自然をどう見るか。それは結局、見られるべき自然の側の問題ではなくて、私たちの側の問題である」と。あるいは、「自然に対する科学者の関係とは、結局、自然の本質の問題ではなく、科学者が今までの偏見からいかに自分自身を開放するかという、科学のほうの仕事である」という言葉に集約されると。この「自然」という言葉を「風景」に置き換えても全く同じことが言えるように思われます。風景の見方は、以前書いたようにピクチャレスクのように、切り抜かれた写真あるいは絵画のように鑑賞する見方に代表されるように、極端に意識して見るような場合もありますが、まったく意識せずに身の回りの環境そのもの、空気のような存在としてと見る？場合もあります。風景の見方としては、前者が正しいということも、後者が間違っているということもない、そんな気がします。

人間の外的な環境への意識の持ち方は、この意識するしないという2つのON、OFFの有り様以外にないものでしょうか。音楽に例えれば、クラシックコンサートで、物音一つ立てず、緊張して聞きこむような聴き方と、レストランのバックにながれるBGMの音楽の中間のような存在、あるいは、それを同時に処理するという、中間というよりは、どちらにも属さ

ない聴き方、どちらにも属する聴き方。今西錦司の自然への見方の偏見から解放されなければという、その偏見とは一体何なのか、自分たちが、今、風景ということを考える際に、知らず知らず心を支配している偏見的な見方というもの、それはなんなのか。それが、この意識するしないというON・OFF的な発想しかできない限界を前提にして考えているということ自体かもしれないということで、少し考えてみましょう。

「みる」という言葉には、「見る」「観る」「診る」「視る」のようにいくつかあって、辞書では、被災地を「視る」という時に使うこの「視る」が、「視点場」のように風景を評価するときに使われていますが、風景を感じる時の「みる」は、芝居等を鑑賞するときに使う「観る」が該当するのでしょうか。このように風景を見る人間の意識、気持ちの有り様で、「みる」あり方が変わります。ということは、風景を評価するときの見方と、鑑賞するときの見方では、違ったアプローチが必要ということか。例えば、医者が患者を診断するときは、全体を見てそれから患部を診るように、風景を評価するときは、広角で全体像をとらえ、そして、患部を診断するように、ピクチャレスク、切り抜きの風景の一部を用いて、何らかの景観上の重要な要素を探し、その意味するところ、モチーフが何なのかを探す、そんな感じでしょうか。そして、風景を鑑賞する場合は、風景を環境と



してとらえ、その中に浸り、周りを見渡す、写真で言えば、パノラマ的な見方をする、そんな感じではないでしょうか。

これは、昨日(2010.07.03)、熊本の通潤橋のそばの白糸大地の棚田で行われた風景デザインサロンに参加して、講師のフランス人技術者シリル＝マルラン氏の話に触発されて感じたことです。彼の話では、フランスでの景観検討につかう写真は、基本はパノラマ写真であるということで、その例を、日本の棚田を素材に実践してくれました。パノラマ写真といっても180°以上もあるようなぐるりのパノラマ写真でなく、通常の写真(20mmぐらい)を2、3枚つなげた程度でしたが、これがまた、状況がよくわかる。後出しじゃんけんではありませんが、実は、私も以前からそんな気はしていました。

そのきっかけは、この前買ったオリンパスのデジタルカメラ「PEN」を撮り始めてからです。今まで、デジタルカメラはNIKONのカメラを愛用していましたが、ブームにのせられ、オリンパスのPENを買って撮り始めてから、写真を撮るということに意識的な変化が起きてしまったということがあります。

そのひとつに、簡単に、そしてほとんどつなぎ目を気にしなくてよいパノラマ写真がポイポイと撮れるところにあります。そして写真を自宅で再生して思ったのですが、パノラマ写真という写真は、臨場感があふれており、自分をその場にいたことを忠実に再現してくれるという気がしていました。(特に、PENのオマケについているオリンパスの写真整理ソフトで再現すると、パノラマ写真の映像を、自動にその場で見渡すような動きを持って見せてくれます)そういうこともあって、シ ril 氏の解説に、一瞬にして理解したという感じがしたのです。

少し、このPENについて。話は少しずれますが、従来のカメラは、現実の世界を写し取るためのカメラと思っていましたし、自分が見たものといかに近い映像が得られるかというところに、カメラの性能の良さを求める意識がありました。このPENは、現実を写し取るのではなく、撮影者の意識上に映っている印象をその場で写しこむことを行うためのカメラであるという違いがあります。目の前に見えている風景に対して、写真を撮るという行為を記録者として位置付けるのではなく、表現者として位置付けることを求めているカメラということでしょう。私がPENにつけているビュー・ファインダーは、光学ファインダーではなく、デジタル処理後のもので、ファインダーでのぞく世界は、現実の世界、風景ではなく、加工

された風景です。確かに、現実の風景そのものを写しこむという機能は当然ありますが、風景をその場で加工し、印象とのマッチングで、撮るプログラム設定をある程度自由に換えて写真を撮るということで、その捉え方のメニューは数種類しかありませんが、一つ一つのメニューがお好み次第で修正できるということを含め、操作行為そのものが、風景を素材にして、いかに作品としての写真を創るかということができるのです。これはおもしろいです。

もともと、見るということは、見ることを意識して見るという行為を行い、その結果、意識に上がる意味での見るができるわけですが、意識下にどのように見ようとしているかが、すでに、見るという行為を選択した際に意識されていると思われ (ちょっと、哲学的な言い回しですみません)。端的にいえば、見たいものを見るということでしょうか。PENの機能として、「トイモード」「ファンタジックモード」のように、その風景を思い出の風景として捉えてみることも、ロマンチックな雰囲気としてみることも可能です。このPENというカメラは、見るという行為で今まで表に出たこなかった意識下の見方を、いっきに表に出すことができる装置なのだ。と今の時点では理解しています。風景を鑑賞するということでは眺めるということは、風景そのものは、気持ちを表現するための素材であって、その風景を材料として表現したいものを表現するというこ

です。あるいは、そういうこともできるのではないかということです。もしそうであれば、「元気の出る風景」「癒しの風景」ということも、風景の機能として可能になると思いますし、自分の心の中にあるものの表出ということで写真撮影するというのであれば、まさしくそれは芸術家の心持ではとおもってしまいます、が……。

観賞者として風景を見ることと、風景を診断する技術者として風景を見てカメラに収めること、この両者の違い、あるいは、風景を風景として見ようとする瞬間の意識と、そうでない環境全般としてとらえて風景の中で自分の心を開放するという時の意識の違い。それは、カメラのファインダーをのぞきながら、また、撮った写真を再生しながら、「広角」「標準」「望遠」と「パノラマ」の違いとして、あるいは、「記録者としての撮影者」と「表現者としての撮影者」の違いとして、整理できそうな気がします。本当かなあ。……

今回のだしに使ったジョン・バージャーの「見るということ」の紹介は、ほとんどしませんでした。が、「絵画」「写真」はもとより、「動物」「野原」などを見るという行為を面白く解説してくれます。今回の考えを触発したもと本でもあります。

【続く】